

# 白痴

坂口安吾

青空文庫



その家には人間と豚と犬と鶏と家鴨あひるが住んでいたが、まったく、住む建物も各々の食物も殆どほとん變つていやしない。物置のようなひん曲つた建物があつて、階下には主人夫婦、天井裏には母と娘が間借りしていて、この娘は相手の分らぬ子供をはら孕んでいる。

伊沢の借りている一室は母屋から分離した小屋で、ここは昔この家の肺病の息子がねていたそうだが、肺病の豚にも贅沢すぎる小屋ではない。それでも押入と便所と戸棚がついていた。

主人夫婦は仕立屋で町内のお針の先生などもやり（それ故肺病の息子を別の小屋へ入れたのだ）町会の役員などもやっている。間借りの娘は元来町会の事務員だったが、町会事務所に寝泊りしていて町会長と仕立屋を除いた他の役員の全部の者（十数人）と公平に係を結んだそうで、そのうちの誰かの種を宿したわけだ。そこで町会の役員共がきよきん醵金してこの屋根裏で子供の始末をつけさせようというのだが、世間は無駄がないもので、役員の一人に豆腐屋がいて、この男だけ娘が妊娠してこの屋根裏にひそんだ後も通つてきて、結局娘はこの男の妾のようにきまつてしまった。他の役員共はこれが分るとさっそく醵金をやめてしまい、この分れ目の一ヶ月分の生活費は豆腐屋が負担すべきだと主張して、支

払いに応じない八百屋と時計屋と地主と何屋だか七八人あり（一人当り金五円）娘は今に至るまで地団駄じだんだふんでいる。

この娘は大きな口と大きな二つの眼の玉をつけていて、そのくせひどく痩せやこけていた。家鴨を嫌つて、鶏にだけ食物の残りをやろうとするのだが、家鴨が横からまきあげるので、毎日腹を立てて家鴨を追っかけている。大きな腹と尻を前後に突きだして奇妙な直立の姿勢で走る。恰好かっこうが家鴨に似ているのであった。

この路地の出口に煙草屋があつて、五十五という婆さんが白粉おしろいつけて住んでおり、七人目とか八人目とかの情夫を追いだして、その代りを中年の坊主にしようか矢張り中年の何屋だかにしようかと煩悶中の由であり、若い男が裏口から煙草を買いに行くと幾つか売ってくれる由で（但し闇値）先生（伊沢のこと）も裏口から行ってごらんさいと仕立屋が言うのだが、あいにく伊沢は勤め先で特配があるので婆さんの世話にならずにすんでいた。

ところがその筋向いの米の配給所の裏手に小金を握った未亡人が住んでいて、兄（職工）と妹と二人の子供があるのだが、この真実の兄妹が夫婦の関係を結んでいる。けれども未亡人は結局その方が安上りだと黙認しているうちに、兄の方に女ができた。そこで妹の方

をかたづけする必要があつて親戚に当る五十とか六十とかの老人のところへ嫁入りということになり、妹が猫イラズを飲んだ。飲んでおいて仕立屋（伊沢の下宿）へお稽古にきて苦しみはじめ、結局死んでしまつたが、そのとき町内の医者が心臓麻痺の診断書をくれて話はそのまま消えてしまつた。え？　どの医者がそんな便利な診断書をくれるんですか、と伊沢が仰天して訊ねると、仕立屋の方が呆氣あつけにとられた面持で、なんですか、よそじゃ、そうじゃないんですか、と訊いた。

このへんは安アパートが林立し、それらの部屋の何分の一かは妾と淫売が住んでいる。それらの女達には子供がなく、又、各々の部屋を綺麗にするという共通の性質をもっている。そのために管理人に喜ばれて、その私生活の乱脈さ背徳性などは問題になつたところが一度もない。アパートの半数以上は軍需工場の寮となり、そこにも女子挺身隊ていしんたいの集団が住んでいて、何課の誰さんの愛人だの課長殿の戦時夫人（というのはつまり本物の夫人は疎開中ということだ）だの重役の二号だの会社を休んで月給だけ貰っている妊娠中の挺身隊だのがいるのである。中に一人五百円の妾というのが一戸を構えていて羨望の的であつた。人殺しが商売だつたという満洲浪人（この妹は仕立屋の弟子）の隣は指圧の先生で、その隣は仕立屋銀次の流れをくむその道の達人だということであり、その裏に海軍少

尉がいるのだが、毎日魚を食い珈琲コーヒーをのみ缶詰をあげ酒を飲み、このあたりは一尺掘ると水がでるので、防空壕の作りようもないというのに、少尉だけはセメントを用いて自宅よりも立派な防空壕をもっていた。又、伊沢が通勤に通る道筋の百貨店（木造二階建）は戦争で商品がなく休業中だが、二階では連日賭場が開帳されており、その顔役は幾つかの国民酒場を占領して行列の人民共を睨にらみつけて連日泥酔にらしていた。

伊沢は大学を卒業すると新聞記者になり、つづいて文化映画の演出家（まだ見習いで単独演出したことはない）になった男で、二十七の年齢にくらべれば裏側の人生にいくらか知識はある筈はずで、政治家、軍人、実業家、芸人などの内幕に多少の消息は心得ていたが、場末の小工場とアパートにとりかこまれた商店街の生態がこんなものだとは想像もしていなかった。戦争以来人心が荒すさんだせいだろうと訊いてみると、いえ、なんですよ、このへんじゃ、先からこんなものでしたねえ、と仕立屋は哲学者のような面持で静かに答えるのであった。

けれども最大の人物は伊沢の隣人であった。

この隣人は気違いだった。相当の資産があり、わざわざ路地のどん底を選んで家を建てたのも気違いの心づかいで、泥棒乃至無用の者の侵入を極度に嫌った結果だろうと思われる

る。なぜなら、路地のどん底に辿りつきこの家の門をくぐって見廻すけれども戸口というものが無いからで、見渡す限り格子のはまった窓ばかり、この家の玄関は門と正反対の裏側にあつて、要するにいつペングルリと建物を廻つた上でないと辿りつくことができない。無用の侵入者は匙を投げて引下る仕組であり、乃至は玄関を探してうろつくうちに何者かの侵入を見破つて警戒管制に入るといふ仕組でもあつて、隣人は浮世の俗物どもを好んでいないのだ。この家は相当間数のある二階建であつたが、内部の仕掛に就いては物知りの仕立屋も多く知らなかつた。

氣違ひは三十前後で、母親があり、二十五六の女房があつた。母親だけは正氣の人間の部類に属している筈だといふ話であつたが、強度のヒステリイで、配給に不服があると跣足で町会へ乗込んでくる町内唯一の女僕であり、氣違ひの女房は白痴であつた。ある幸多き年のこと、氣違ひが発心して白装束に身をかため四国遍路に旅立つたが、そのとき四国のどこかしらで白痴の女と意氣投合し、遍路みやげに女房をつれて戻つてきた。氣違ひは風采堂々たる好男子であり、白痴の女房はこれも然るべき家柄の然るべき娘のような品の良さで、眼の細々とうつとうしい、瓜実顔の古風の人形か能面のような美しい顔立ちで、二人並べて眺めただけでは、美男美女、それも相当教養深遠な好一对としか見受けら

れない。氣違いは度の強い近眼鏡をかけ、常に万巻の読書に疲れたような憂わしげな顔をしていた。

ある日この路地で防空演習があつてオカミさん達が活躍していると、着流し姿でゲタゲタ笑いながら見物していたのがこの男で、そのうち俄にわかに防空服装に着かえて現れて一人のバケツをひったくつたかと思うと、エイとか、ヤーとか、ホーホーという数種類の奇妙な声をかけて水を汲み水を投げ、梯子はしごをかけて塀に登り、屋根の上から号令をかけ、やがて一場の演説（訓辞）を始めた。伊沢はこのときに至つて始めて氣違ひであることに氣付いたので、この隣人は時々垣根から侵入してきて仕立屋の豚小屋で残飯のバケツをぶちまけついでに家鴨に石をぶつけ、全然何食わぬ顔をして鶏に餌をやりながら突然蹴とばしたりするのであつたが、相当の人物と考へていたので、靜かに黙礼などを取交していたのであつた。

だが、氣違ひと常人とどこが違つてゐるといふのだ。違つてゐるといへば、氣違ひの方が常人よりも本質的に慎み深いぐらいのもので、氣違ひは笑いたい時にゲタゲタ笑い、演説したい時に演説をやり、家鴨に石をぶつかけたり、二時間ぐらい豚の顔や尻を突ついたりする。けれども彼等は本質的にはるかに人目を怖れており、私生活の主要な部分は特



別細心の注意を払って他人から絶縁しようとする腐心している。門からグルリと一廻りして玄関をつけたのもそのためであり、彼等の私生活は概して物音がすくなく、他に対して無用なる饒舌じょうぜつに乏しく、思索的なものであった。路地の片側はアパートで伊沢の小屋にのしかかるように年中水の流れる音と女房どもの下品な声が溢あふれており、姉妹の淫売が住んでいて、姉に客のある夜は妹が廊下を歩きつづけており妹に客のある時は姉が深夜の廊下を歩いている。氣違いがゲタゲタ笑うというだけで人々は別の人種だと思っていた。

白痴の女房は特別静かでおとなしかった。何かおどおどと口の中で言うだけで、その言葉は良くききとれず、言葉のききとれる時でも意味がハッキリしなかった。料理も、米を炊くことも知らず、やらせれば出来るかも知れないが、ヘマをやって怒られるとおどおどして益々ヘマをやるばかり、配給物をとりに行っても自身では何もできず、ただ立っているというだけで、みんな近所の者がしてくれるのだ。氣違いの女房ですもの白痴でも当然、その上の慾を言っではいけませんまいと人々が言うが、母親は大の不服で、女が御飯ぐらい炊けなくって、と怒っている。それでも常はたしなみのある品の良い婆さんなのだが、何がさて一方ならぬヒステリーで、狂い出すと氣違い以上に癡どうもう猛もうで三人の氣違いのうち婆さんの叫喚きょうかんが頭ぬけて騒さわがしく病的だった。白痴の女は怯おびえてしまつて、何事もない

平和な日々ですら常におどおどし、人の蹺音あしおとにもギクリとして、伊沢がヤアと挨拶すると却かえってボンヤリして立ちすくむのであった。

白痴の女も時々豚小屋へやってきた。気違ひの方は我家の如くに堂々と侵入してきて家鴨に石をぶついたり豚の頬つぺたを突き廻したりしているのだが、白痴の女は音もなく影の如くに逃げこんできて豚小屋の蔭に息をひそめているのであった。いわば此処ここは彼女の待避所で、そういう時には大概隣家でオサヨさんオサヨさんとよぶ婆さんの鳥類的な叫びが起り、そのたびに白痴の身体はすくんだり傾いたり反響を起し、仕方なく動き出すには虫の抵抗の動きのような長い反復があるのであった。

新聞記者だの文化映画の演出家などは賤業中の賤業であった。彼等の心得ているのは時代の流行ということだけで、動く時間に乘遅れまいとすることだけが生活であり、自我の追求、個性や独創というものはこの世界には存在しない。彼等の日常の会話の中には会社員だの官吏だの学校の教師に比べて自我だの人間だの個性だの独創だのという言葉が氾はんら濫らんしすぎているのであったが、それは言葉の上だけの存在であり、有金をはたいて女を口説いて宿酔ふつかよいの苦痛が人間の悩みだと云うような馬鹿馬鹿しいものなのだった。ああ日の丸の感激だの、兵隊さんよ有難う、思わず目頭が熱くなったり、ズドズドズドは爆撃

の音、無我夢中で地上に伏し、パンパンパンは機銃の音、およそ精神の高さもなければ一行の実感すらもない架空の文章に憂身をやつし、映画をつくり、戦争の表現とはそういうものだと思いいこんでいる。又ある者は軍部の検閲で書きようがないと言うけれども、他に真実の文章の心当りがあるわけではなく、文章自体の真実や実感検閲などには関係のない存在だ。要するに如何なる時代にもこの連中には内容がなく空虚な自我があるだけだ。流行次第で右から左へどうにでもなり、通俗小説の表現などからお手本を学んで時代の表現だと思いいこんでいる。事実時代というものは只それだけの浅薄愚劣なものでもあり、日本二千年の歴史を覆すこの戦争と敗北が果して人間の真実に何の関係があったであろうか。最も内省の稀薄な意志と衆愚の妄動だけによつて一国の運命が動いている。部長だの社長の前で個性だの独創だのと言い出すと顔をそむけて馬鹿な奴だという言外の表示を見せて、兵隊さんよ有難う、ああ日の丸の感激、思わず目頭が熱くなり、OK、新聞記者とはそれだけで、事実、時代そのものがそれだけだ。

師団長閣下の訓辞を三分間もかかつて長々と写す必要がありませんか、職工達の毎朝のノリトのような変テコな唄を一から十まで写す必要があるのですか、と訊いてみると、部長はプイと顔をそむけて舌打ちしてやにわに振向くと貴重品の煙草をグシャリ灰皿へ押しつ

ぶして睨みつけて、おい、怒濤どとうの時代に美が何物だい、芸術は無力だ！ ニューズだけが  
真実なんだ！ と呶鳴どなるのであった。演出家どもは演出家どもで、企画部員は企画部員で、  
徒党を組み、徳川時代の長脇差と同じような情誼じょうぎの世界をつくりだし義理人情で才能を  
処理して、会社員よりも会社員的な順番制度をつくっている。それによって各自の凡庸ほんよう  
さを擁護し、芸術の個性と天才による争覇を罪悪視し組合違反と心得て、相互扶助の精神  
による才能の貧困の救済組織を完備していた。内にあつては才能の貧困の救済組織である  
けれども外に出でてはアルコールの獲得組織で、この徒党は国民酒場を占領し三四本ずつ  
ビールを飲み酔つ払つて芸術を論じている。彼等の帽子や長髪やネクタイや上着ブルースは芸術  
家であつたが、彼等の魂や根性は会社員よりも会社員的であつた。伊沢は芸術の独創を信  
じ、個性の独自性を諦めるあきらことができないので、義理人情の制度の中で安息することがで  
きないばかりか、その凡庸さと低俗卑劣な魂を憎まずにいられなかつた。彼は徒党の除け  
者となり、挨拶しても返事もされず、中には睨む者もある。思いきつて社長室へ乗込んで、  
戦争と芸術性の貧困とに理論上の必然性がありますか。それとも軍部の意思ですか、ただ  
現実を写すだけならカメラと指が二三本あるだけで沢山ですよ。如何なるアングルによつ  
て之これを裁断し芸術に構成するかという特別な使命のために我々芸術家の存在が——社長は

途中で顔をそむけて苦りきって煙草をふかし、お前はなぜ会社をやめないのか、徴用が怖いからか、という顔附で苦笑をはじめ、会社の企画通り世間なみの仕事に精をだすだけで、それで月給が貰えるならよけいなことを考えるな、生意気すぎるといふ顔附になり、一言も返事せずに、帰れという身振りを示すのであった。賤業中の賤業でなくて何物であろうか。ひと思いに兵隊にとられ、考える苦しさから救われるなら、弾丸も飢餓もむしろ太平樂のようにすら思われる時があるほどだった。

伊沢の会社では「ラバウルを陥おとすな」とか「飛行機をラバウルへ！」とか企画をたてコンテを作っているうちに米軍はもうラバウルを通りこしてサイパンに上陸していた。「サイパン決戦！」企画会議も終らぬうちにサイパン玉砕、そのサイパンから米機が頭上にとびはじめている。「焼夷しょうい弾だんの消し方」「空の体当り」「ジャガ芋の作り方」「一機も生きて返すまじ」「節電と飛行機」不思議な情熱であった。底知れぬ退屈を植えつける奇妙な映画が次々と作られ、生フィルムは欠乏し、動くカメラは少なくなり、芸術家達の情熱は白熱的に狂躁し「神風特攻隊」「本土決戦」「ああ桜は散りぬ」何ものかに憑つかれた如く彼等の詩情は興奮している。そして蒼あおざめた紙の如く退屈無限の映画がつくられ、明日の東京は廢墟になろうとしていた。

伊沢の情熱は死んでいた。朝目がさめる。今日も会社へ行くのかと思うと睡くなり、うとうとすると警戒警報がなりひびき、起き上りゲートルをまき煙草を一本ぬきだして火をつける。ああ会社を休むとこの煙草がなくなるのだな、と考えるのであった。

ある晩、おそくなり、ようやく終電にとりつくことのできた伊沢は、すでに私線がなかったたので、相当の夜道を歩いて我家へ戻ってきた。あかりをつけると奇妙に万年床の姿が見えず、留守中誰かが掃除をしたということも、誰かが這入ったことすらも例がないので訝りながら押入をあけると、積み重ねた蒲団の横に白痴の女がかくれていた。不安の眼で伊沢の顔をうかがい蒲団の間へ顔をもぐらしてしまつたが、伊沢の怒らぬことを知ると、安堵のために親しさが溢れ、呆れるぐらい落着いてしまつた。口の中でブツブツと呟くようにしか物を言わず、その呟きもこつちの訊ねることと何の関係もないことをああ言い又こう言い自分自身の思いつめたことだけをそれも至極漠然と要約して断片的に言い綴っている。伊沢は問わずに事情をさととり、多分叱られて思い余つて逃げこんで来たのだろうと思つたから、無益な怯えをなるべく与えぬ配慮によつて質問を省略し、いつごろどこから這入つてきたかということだけを訊ねると、女は訳の分らぬことをあれこれブツブツ言つたあげく、片腕をまくりあげて、その一ヶ所をなでて（そこにはカスリ傷がついていた）、

私、痛いのか、とか、今も痛むのか、とか、さつきも痛かったのか、とか、色々時間をこまかく区切っているのか、ともかく夜になつてから窓から這入ったことが分つた。跣足はだしで外を歩きまわつて這入つてきたから部屋を泥でよごした、ごめんなさいね、という意味も言つたけれども、あれこれ無数の袋小路をうろつき廻る眩きの中から意味をまとめて判断するので、ごめんなさいね、がどの道に連絡しているのだから決定的な判断はできないのだった。

深夜に隣人を叩き起して怯えきつた女を返すのもやりにくいことであり、さりとして夜が明けて女を返して一夜泊めたということが如何なる誤解を生みだすか、相手が氣違いのことでだから想像すらもつかかなかつた。ままよ、伊沢の心には奇妙な勇氣が湧いてきた。その実体は生活上の感情喪失に対する好奇心と刺戟しげきとの魅力に惹かれただけのものであつたが、どうにでもなるがいい、ともかくこの現実を一つの試練と見ることが俺の生き方に必要なだけだ。白痴の女の一夜を保護するという眼前の義務以外に何を考え何を怖れる必要もないのだと自分自身に言いかけた。彼はこの唐突千萬な出来事に變に感動していることを差はずべきことではないのだと自分自身に言いかけた。

二つの寢床をしき女をねせて電燈を消して一二分もしたかと思うと、女は急に起き上り寢床を脱いで、部屋のどこか片隅にうずくまっているらしい。それがもし真冬でなければ

ば伊沢は強いてこだわらず眠ったかも知れなかったが、特別寒い夜更けで、一人分の寢床を二人に分割しただけでも外気がじかに肌にせまり身体の顫えがとまらぬぐらい冷めたか  
つた。起き上つて電燈をつけると、女は戸口のところに襟えりをかき合せてうずくまっており、  
まるで逃げ場を失つて追いつめられた眼の色をしている。どうしたの、ねむりなさい、と  
言えば呆気ないほどすぐ頷うなずいて再び寢床にもぐりこんだが、電気を消して一二分もすると、  
又、同じように起きてしまう。それを寢床へつれもどして心配することはない、私はあな  
たの身体に手をふれるようなことはしないからと言いきかせると、女は怯えた眼附をして  
何か言訳じみたことを口の中でブツブツ言っているのであった。そのまま三たび目の電氣  
を消すと、今度は女はすぐ起き上り、押入の戸をあけて中へ這入つて内側から戸をしめた。  
この執拗なやり方に伊沢は腹を立てた。手荒く押入を開け放してあなたは何を勘違いを  
しているのですか、あれほど説明もしているのに押入へ這入つて戸をしめるなどとは人を  
侮辱するも甚しい、それほど信用できない家へなぜ逃げこんできたのですか、それは人を  
愚弄し、私の人格に不当な恥を与え、まるであなたが何か被害者のようではありませんか、  
茶番もいい加減にしたまえ。けれどもその言葉の意味もこの女には理解する能力すらもな  
いのだと思つと、これくらい張合のない馬鹿馬鹿しさもないもので女の横ツ面を殴りつけ



てさつきと眠る方が何より気がきいていると思うのだった。すると女は妙に割切れぬ顔附をして何か口の中でブツブツ言っている、私は帰りたいたい、私は来なければよかった、という意味の言葉であるらしい。でも私はもう帰るところがなくなつたから、と言うので、その言葉には伊沢もさすがに胸をつかれて、だから、安心してここで一夜を明かしたらいいでしょう、私が悪意をもたないのにまるで被害者のような思いあがつたことをするから腹を立てただけのことです、押入の中などにはいらずに蒲団の中でおやすみなさい。すると女は伊沢を見つめて何か早口にブツブツ言う。え？ なんですか、そして伊沢は飛び上るほど驚いた。なぜなら女のブツブツの中から私はあなたに嫌われていますもの、という一言がハッキリききとれたからである。え、なんですって？ 伊沢が思わず目を見開いて訊き返すと、女の顔はしょうぜん 惘然として、私はこなければよかった、私はきらわれている、私はそうは思っていないかった、という意味の事をくどくどと言ひ、そしてあらぬ一ヶ所を見つめて放心してしまつた。

伊沢ははじめて了解した。

女は彼を怖れているのではなかつたのだ。まるで事態はあべこべだ。女は叱られて逃げ場に窮してそれだけの理由によつて来たのではない。伊沢の愛情を目算に入れていたので

あつた。だがいつたい女が伊沢の愛情を信じることが起り得るような何事があつたであらうか。豚小屋のあたりや路地や路上でヤアと云つて四五へん挨拶したぐらい、思えばすべてが唐突で全く茶番に外ならず、伊沢の前に白痴の意志や感受性や、ともかく人間以外のものが強要されているだけだつた。電燈を消して一二分たち男の手が女のからだに触れないために嫌われた自覚をいだいて、その羞しさに蒲団をぬけだすということが、白痴の場合それが真実悲痛なことであるのか、伊沢がそれを信じていいのか、これもハッキリは分らない。遂には押入へ閉じこもる。それが白痴の恥辱と自卑の表現と解していいのか、それを判断する為の言葉すらもないのだから、事態はともかく彼が白痴と同格に成り下る以外に法がない。なまじいに人間らしい分別が、なぜ必要であらうか。白痴の心の素直さを彼自身も亦もつことまたが人間の恥辱であらうか。俺にもこの白痴のような心、幼い、そして素直な心が何より必要だつたのだ。俺はそれをどこかへ忘れ、ただあくせくした人間共の思考の中でうすぎたなく汚れ、虚妄の影を追い、ひどく疲れていただけだ。

彼は女を寢床へねせて、その枕元に坐り、自分の子供、三ツか四ツの小さな娘をねむらせるように額の髪の毛をなでてやると、女はボンヤリ眼をあけて、それがまったく幼い子供の無心さと変るところがないのであつた。私はあなたを嫌っているのではない、人間の

愛情の表現は決して肉体だけのものではなく、人間の最後の住みかはふるさとで、あなたはいわば常にそのふるさとの住人のようなものなのだから、などと伊沢も始めは妙にしかつめらしくそんなことも言いかけてみたが、もとよりそれが通じるわけではないのだし、いったい言葉が何物であろうか、何ほどの値打があるのだろうか、人間の愛情すらもそれだけが真実のものだという何のあかしもあり得ない、生の情熱を託するに足る真実なものが果してどこに有り得るのか、すべては虚妄の影だけだ。女の髪の毛をなでていると、慟うごく哭うきたい思いがこみあげ、さだまる影すらもないこの捉とらえがたい小さな愛情が自分の一生の宿命であるような、その宿命の髪の毛を無心になでているような切ない思いになるのであった。

この戦争はいったいどうなるのであろう。日本は負け米軍は本土に上陸して日本人の大半は死滅してしまうのかも知れない。それはもう一つの超自然の運命、いわば天命のようにしか思われなかった。彼には然しかしもつと卑小な問題があった。それは驚くほど卑小な問題で、しかも眼の先に差迫り、常にちらついて放れなかった。それは彼が会社から貰う二百円ほどの給料で、その給料をいつまで貰うことができるか、明日にもクビになり路頭に迷いはしないかという不安であった。彼は月給を貰う時、同時にクビの宣告を受けはしな

いかとビクビクし、月給袋を受取ると一月延びた命のために呆れるぐらい幸福感を味うのだが、その卑小さを顧みていつも泣きたくなるのであった。彼は芸術を夢みていた。その芸術の前ではただ一粒の塵埃<sup>じんあい</sup>でしかないような二百円の給料がどうして骨身にからみつき、生存の根底をゆさぶるような大きな苦悶になるのであるのか。生活の外形のみのことではなくその精神も魂も二百円に限定され、その卑小さを凝視して気も違わずに平然としていることが尚<sup>なほ</sup>更<sup>さら</sup>なさけなくなるばかりであった。怒濤の時代に美が何物だい。芸術は無力だ！ という部長の馬鹿馬鹿しい大声が、伊沢の胸にまるで違つた真実をこめ鋭いそして巨大な力で食いこんでくる。ああ日本は敗ける。泥人形のくずれるように同胞たちがバタバタ倒れ、吹きあげるコンクリートや煉瓦の屑<sup>くず</sup>と一緒に無数の脚だの首だの腕だのが舞いあがり、木も建物も何も無い平な墓地になつてしまふ。どこへ逃げ、どの穴へ追いつめられ、どこで穴もろとも吹きとばされてしまふのだから、夢のような、けれどもそれはもし生き残ることができたら、その新鮮な再生のために、そして全然予測のつかない新世界、石屑だらけの野原の上の生活のために、伊沢はむしろ好奇心がうずくのだつた。それは半年か一年さきの当然訪れる運命だったが、その訪れの当然さにも拘<sup>かか</sup>わらず、夢の中の世界のような遙かな戯れにしか意識されていかなかった。眼のさきの全<sup>す</sup>べてをふさぎ、生き

る希望を根こそぎさらい去るたつた二百円の決定的な力、夢の中にまで二百円に首をしめられ、うなされ、まだ二十七の青春のあらゆる情熱が漂白されて、現実にすでに暗黒の曠野の上を茫々<sup>ぼうぼう</sup>と歩くだけではないか。

伊沢は女が欲しかった。女が欲しいという声は伊沢の最大の希望ですらあったのに、その女との生活が二百円に限定され、鍋だの釜だの味噌だの米だのみんな二百円の呪文<sup>じゆもん</sup>を負い、二百円の呪文に憑<sup>つ</sup>かれた子供が生まれ、女がまるで手先のように呪文に憑<sup>つ</sup>かれた鬼と化して日々ブツブツ呟<sup>つぶや</sup>いている。胸の灯も芸術も希望の光もみんな消えて、生活自体が道ばたの馬糞のようにグチャグチャに踏みしだかれて、乾きあがって風に吹かれて飛びちり跡形もなくなつて行く。爪の跡すら、なくなつて行く。女の背にはそういう呪文<sup>から</sup>が絡<sup>から</sup>みついていたのであった。やりきれない卑小な生活だった。彼自身にはこの現実の卑小さを裁く力すらもない。ああ戦争、この偉大なる破壊、奇妙<sup>きてれつ</sup>奇天烈な公平さでみんな裁かれ日本中が石屑だらけの野原になり泥人形がバタバタ倒れ、それは虚無のなんと切ない巨大な愛情だろうか。破壊の神の腕の中で彼は眠りこけたくなり、そして彼は警報がなるとむしろ生き生きしてゲートルをまくのであった。生命の不安と遊ぶことだけが毎日の生きがいだった。警報が解除になるとガツカリして、絶望的な感情の喪失が又はじまるのであ

った。

この白痴の女は米を炊くことも味噌汁をつくることも知らない。配給の行列に立っているのが精一杯で、喋ることすらも自由ではないのだ。まるで最も薄い一枚のガラスのように喜怒哀楽の微風にすら反響し、放心と怯えの皺の間へ人の意志を受け入れ通過させているだけだ。二百円の悪霊すらも、この魂には宿ることができないのだ。この女はまるで俺のために造られた悲しい人形のようにではないか。伊沢はこの女と抱き合い、暗い曠野を飄々々と風に吹かれて歩いている、無限の旅路を目に描いた。

それにも拘らず、その想念が何か突飛に感じられ、途方もない馬鹿げたことのように思われるのは、そこにも亦卑また小きわまる人間の殻が心の芯をむしばんでいるせいなのだろう。そしてそれを知りながら、しかも尚、わきでるようなこの想念と愛情の素直さが全然虚妄のものにしか感じられないのはなぜだろう。白痴の女よりもあのアパートの淫売婦が、そこでどこかの貴婦人がより人間的だという何か本質的な掟おきてが在るのだろうか。けれどもまるでその掟が厳として存在している馬鹿馬鹿しい有様なのであった。

俺は何を怖れているのだろうか。まるであの二百円の悪霊が——俺は今この女によってその悪霊と絶縁しようとしているのに、そのくせ矢張り悪霊の咒文によって縛りつけられ

ているではないか。怖れているのはただ世間の見栄だけだ。その世間とはア・パートの淫売婦だの妾だの妊娠した挺身隊だの家鴨のような鼻にかかった声をだして喚わめいているオカミサン達の行列会議だけのことだ。そのほかに世間などはどこにもありはしないのに、そのくせこの分りきった事実を俺は全然信じていない。不思議な掟に怯えているのだ。

それは驚くほど短い（同時にそれは無限に長い）一夜であった。長い夜のまるで無限の続きだと思っていたのに、いつかしら夜が白み、夜明けの寒気が彼の全身を感覚のない石のようにかたまらせていた。彼は女の枕元で、ただ髪の毛をなでつづけていたのであった。



その日から別な生活がはじまった。

けれどもそれは一つの家に女の肉体がふえたということの外には別でもなければ変わつてすらもいなかった。それはまるで嘘のような空々しきで、たしかに彼の身边に、そして彼の精神に、新たな芽生えの唯一本の穂先すら見出すことができなのだ。その出来事の異常さをとまかく理性的に納得しているというだけで、生活自体に机の置き場所が変わったほ

どの変化も起きてはいなかった。彼は毎朝出勤し、その留守宅の押入の中に一人の白痴が残されて彼の帰りを待っている。しかも彼は一足でると、もう白痴の女のことなどは忘れており、何かそういう出来事がもう記憶にも定かではない十年二十年前に行われていたかのような遠い気持がするだけだった。

戦争という奴が、不思議に健全な健忘性なのであった。まったく戦争の驚くべき破壊力や空間の変転性という奴はたった一日が何百年の変化を起し、一週間前の出来事が数年前の出来事に思われ、一年前の出来事などは、記憶の最もどんだ底の下積の底へ隔てられていた。伊沢の近くの道路だの工場の四囲の建物などが取りこわれ町全体がただ舞いあがる埃ほこりのような疎開騒ぎをやらかしたのもつい先頃のことであり、その跡すらも片づいていないのに、それはもう一年前の騒ぎのように遠ざかり、街の様相を一変する大きな変化が二度目にそれを眺める時にはただ当然な風景でしかなくなっていた。その健康な健忘性の雑多なカケラの一つの中に白痴の女がやっぱり霞んでいる。昨日まで行列していた駅前の居酒屋の疎開跡の棒切れだの爆弾に破壊されたビルの穴だの街の焼跡だの、それらの雑多のカケラの間にはさまれて白痴の顔がころがっているだけだった。

けれども毎日警戒警報がなる。時には空襲警報もなる。すると彼は非常に不愉快な精神



状態になるのであった。それは彼の留守宅の近いところに空襲があり知らない変化が現に起っていないかという懸念であったが、その懸念の唯一の理由はただ女がとりみだして、とびだしてすべてが近隣へ知れ渡っていないかという不安なだけだった。知らない変化の不安のために、彼は毎日明るいうちに家へ帰ることができなかつた。この低俗な不安を克服し得ぬ惨めさに幾たび虚しく反抗したか、彼はせめて仕立屋に全てを打開けてしまいたいと思うのだったが、その卑劣さに絶望して、なぜならそれは被害の最も軽少な告白を行うことによつて不安をまぎらす惨めな手段にすぎないので、彼は自分の本質が低俗な世間なみにすぎないことを呪い憤るのみだつた。

彼には忘れ得ぬ二つの白痴の顔があつた。街角を曲る時だの、会社の階段を登る時だの、電車の人ごみを脱げでる時だの、はからざる随所に二つの顔をふと思ひだし、そのたびに彼の一切の思念が凍り、そして一瞬の逆上が絶望的に凍りついているのであつた。

その顔の一つは彼が始めて白痴の肉体にふれた時の白痴の顔だ。そしてその出来事自体はその翌日には一年昔の記憶の彼方かなたへ遠ざけられているのであつたが、ただ顔だけが切り放されて思ひだされてくるのである。

その日から白痴の女はただ待ちももうけている肉体であるにすぎずその外の何の生活も、

ただひときれの考えすらもないのであった。常にただ待ちもうけていた。伊沢の手が女の肉体の一部にふれるというだけで、女の意識する全部のことは肉体の行為であり、そして身体も、そして顔も、ただ待ちもうけているのみであった。驚くべきことに、深夜、伊沢の手が女にふれるというだけで、眠り痴れた肉体が同一の反応を起し、肉体のみは常に生き、ただ待ちもうけているのである。眠りながらも！ けれども、目覚めている女の頭に何事が考えられているかと云えば、元々ただの空虚であり、在るものはただ魂の昏睡と、そして生きている肉体のみではないか。目覚めた時も魂はねむり、ねむった時もその肉体は目覚めている。在るものはただ無自覚な肉慾のみ。それはあらゆる時間に目覚め、虫の如き倦<sup>う</sup>まざる反応の蠢<sup>しゅん</sup>動<sup>どう</sup>を起す肉体であるにすぎない。

も一つの顔、それは折から伊沢の休みの日であったが、白昼遠からぬ地区に二時間にわたる爆撃があり、防空壕をもたない伊沢は女と共に押入にもぐり蒲団を楯<sup>たて</sup>にかくれていた。爆撃は伊沢の家から四五百米離れた地区へ集中したが、地軸もろとも家はゆれ、爆撃の音と同時に呼吸も思念も中絶する。同じように落ちてくる爆弾でも焼夷弾と爆弾では凄みにおいて青大将と蝮<sup>まむし</sup>ぐらいの相違があり、焼夷弾にはガラガラという特別不気味な音響が仕掛けてあつても地上の爆発音がないのだから音は頭上でスウと消え失せ、竜頭蛇尾とはこ

のことで、蛇尾どころか全然尻尾がなくなるのだから、決定的な恐怖感に欠けている。けれども爆弾という奴は、落下音こそ小さく低いが、ザアという雨降りの音のようなただ一本の棒をひき、此奴が最後に地軸もろとも引裂くような爆発音を起すのだから、ただ一本の棒にこもった充実した凄味といったら論外で、ズドズドズドと爆発の足が近づくと時の絶望的な恐怖ときては額面通りに生きた心持がないのである。おまけに飛行機の高度が高いので、ブンブンという頭上通過の米機の音も至極かすかに何食わぬ風に響いていて、それはまるでよそ見をしている怪物に大きな斧おので殴りつけられるようなものだ。攻撃する相手の様子が不確かだから爆音の唸りの変な遠さが、甚だ不安であるところへ、そこからザアと雨降りの棒一本の落下音がのびてくる。爆発を待つまの恐怖、全く此奴は言葉も呼吸も思念もとまる。愈々いよいよ今度はお陀仏だぶつだという絶望が兇狂寸前の冷たさで生きて光っているだけだ。

伊沢の小屋は幸い四方がアパートだの気違いだの仕立屋などの二階屋でとりかこまれていたので、近隣の家は窓ガラスがわれ屋根の傷んだ家もあったが、彼の小屋のみガラスに罅ひびすらもはいらなかった。ただ豚小屋の前の畑に血だらけの防空頭巾が落ちてきたばかりであった。押入の中で、伊沢の目だけが光っていた。彼は見た。白痴の顔を。虚空をつか

むその絶望の苦悶を。

ああ人間には理智がある。如何なる時にも尚いくらかの抑制や抵抗は影をとどめているものだ。その影ほどの理智も抑制も抵抗もないということが、これほどあさましいものだとはい！ 女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りついていた。苦悶は動き苦悶はもがき、そして苦悶が一滴の涙を落している。もし犬の眼が涙を流すなら犬が笑うと同様に醜怪きわまるものであろう。影すらも理智のない涙とは、これほど醜悪なもののだとい！ 爆撃のさ中に於て四五歳乃至六七歳の幼児達は奇妙に泣かないものである。彼等の心臓は波のような動悸をうち、彼等の言葉は失われ、異様な目を大きく見開いているだけだ。全身に生きているのは目だけであるが、それは一見したところ、ただ大きく見開かれているだけで、必ずしも不安や恐怖というものの直接劇的な表情を刻んでいるというほどではない。むしろ本来の子供よりも却<sup>かえ</sup>つて理智的に思われるほど情意を静かに殺している。その瞬間にはあらゆる大人もそれだけで、或いはむしろそれ以下で、なぜならむしろ露骨な不安や死への苦悶を表わすからで、いわば子供が大人よりも埋智的にすら見えるのだった。

白痴の苦悶は、子供達の大きな目とは似ても似つかぬものであった。それはただ本能的

な死への恐怖と死への苦悶があるだけで、それは人間のものではなく、虫のものですらもなく、醜悪な一つの動きがあるのみだった。やや似たものがあるとすれば、一寸五分ほどの芋虫が五尺の長さにふくれあがつてもがいている動きぐらいのものだろう。そして目に一滴の涙をこぼしているのである。

言葉も叫びも呻きもなく、表情もなかった。伊沢の存在すらも意識してはいなかった。人間ならばかほどの孤独が有り得る筈はない。男と女とただ二人押入にいて、その一方の存在を忘れ果てるということが、人の場合に有り得べき筈はない。人は絶対の孤独というが他の存在を自覚してのみ絶対の孤独も有り得るので、かほどまで盲目的な、無自覚な、絶対の孤独が有り得ようか。それは芋虫の孤独であり、その絶対の孤独の相のあさましき。心の影の片鱗へんりんもない苦悶の相の見るに堪えぬ醜悪さ。

爆撃が終った。伊沢は女を抱き起したが、伊沢の指の一本が胸にふれても反応を起す女が、その肉慾すら失っていた。このむくろを抱いて無限に落下しつづけている、暗い、暗い、無限の落下があるだけだった。

彼はその日爆撃直後に散歩にでて、なぎ倒された民家の間で吹きとばされた女の脚も、腸のとびだした女の腹も、ねじきれた女の首も見たのであった。

三月十日の空襲の焼跡もまだ吹きあげる煙をくぐって伊沢は<sup>あて</sup>当もなく歩いていった。人間が焼鳥と同じようにあつちこつちに死んでいる。ひとかたまりに死んでいる。まったく焼鳥と同じことだ。怖くもなければ、汚くもない。犬と並んで同じように焼かれている死体もあるが、それは全く犬死で、然しそこにはその犬死の悲痛さも感慨すらも有りはしない。人間が犬の如くに死んでいるのではなく、犬と、そして、それと同じような何物かが、ちやうど一皿の焼鳥のように盛られ並べられているだけだった。犬でもなく、もとより人間ですらもない。

白痴の女が焼け死んだら——土から作られた人形が土にかえるだけではないか。もしこの街に焼夷弾のふりそそぐ夜がきたら……伊沢はそれを考えると、変に落着いて沈み考えている自分の姿と自分の顔、自分の目を意識せずにいられなかった。俺は落着いている。そして、空襲を待っている。よかろう。彼はせせら笑うのだった。俺はただ醜悪なものが嫌いなだけだ。そして、元々魂のない肉体が焼けて死ぬだけのことではないか。俺は女を殺しはしない。俺は卑劣で、低俗な男だ。俺にはそれだけの度胸はない。だが、戦争がたぶん女を殺すだろう。その戦争の冷酷な手を女の頭上へ向けるためのちよつとした手掛りだけをつかめばいいのだ。俺は知らない。多分、何かある瞬間が、それを自然に解決して

いるにすぎないだろう。そして伊沢は空襲をきわめて冷静に待ち構えていた。



それは四月十五日であった。

その二日前、十三日に、東京では二度目の夜間大空襲があり、池袋だの巣鴨だの山手方面に被害があつたが、たまたまその罹災証明りさいが手にはいつたので、伊沢は埼玉へ買出しにでかけ、いくらかの米をリュックに背負つて帰つて来た。彼が家へ着くと同時に警戒警報が鳴りだした。

次の東京の空襲がこの街のあたりだろうということは焼け残りの地域を考えれば誰にも想像のつくことで、早ければ明日、遅くとも一ヶ月とはかからないこの街の運命の日が近づいている。早ければ明日と考へたのは、これまでの空襲の速度、編隊夜間爆撃の準備期間の間隔が早くて明日ぐらいであつたからで、この日がその日にならうとは伊沢は予想していなかつた。それ故買出しにも出掛けたので、買出しと云つても目的は他にもあり、この農家は伊沢の学生時代に縁故のあつた家であり、彼は二つのトランクとリュックにつめ

た物品を預けることがむしろ主要な目的であった。

伊沢は疲れきっていた。旅装は防空服装でもあったから、リュックを枕にそのまま部屋のまんなかひっくりかえって、彼は実際この差しせまった時間にうとうととねむってしまった。ふと目がさめると諸方のラジオはがんがなりたてており、編隊の先頭はもう伊豆南端にせまり、伊豆南端を通過した。同時に空襲警報がなりだした。愈々この街の最後の日だ、伊沢は直覚した。白痴を押入の中に入れ、伊沢はタオルをぶらさげ歯ブラシをくわえて井戸端へでかけたが、伊沢はその数日前にライオン煉齒磨ねりはみがきを手に入れ長い間忘れていた煉齒磨の口の中にしみわたる爽快さをなつかしんでいた。運命の日を直覚するとどういふわけだか歯をみがき顔を洗う気になつたが、第一にその煉齒磨が当然あるべき場所からほんのちよつと動いていただけで長い時間（それは実に長い時間に思われた）見当らず、ようやくそれを見附けると今度は石鹼（この石鹼も芳香のある昔の化粧石鹼）がこれもちよつと場所が動いていただけで長い時間見当らず、ああ俺は慌ざんじてているな、落着け、落着け、頭を戸棚にぶついたり机につまざいたり、そのために彼は暫時の間一切の動きと思念を中絶させて精神統一をはかろうとするが、身体自体が本能的に慌ざんじてだして滑り動いて行くのである。ようやく石鹼を見つけたして井戸端へ出ると仕立屋夫婦が畑の隅



の防空壕へ荷物を投げこんでおり、家鴨によく似た屋根裏の娘が荷物をブラさげてうろろしていた。伊沢はともかく煉歯磨と石鹼を断念せずに突きとめた執拗さを祝福し、果してこの夜の運命はどうなるのだろうと思った。まだ顔をふき終らぬうちに高射砲がなりはじめ、頭をあげると、もう頭上に十何本の照空燈が入りみだれて真上をさして騒いでおり、こうぼう光芒のまんなかに米機がぼつかり浮いている。つづいて一機、また一機、ふと目を下方へおろしたら、もう駅前の方角が火の海になっていた。

愈々来た。事態がハッキリすると伊沢はようやくやく落着いた。防空頭巾をかぶり、蒲団をかぶって軒先に立ち二十四機まで伊沢は数えた。ポツカリ光芒のまんなかに浮いて、みんな頭上を通過している。

高射砲の音だけが気が違ったように鳴りつづけ、爆撃の音は一向に起らない。二十五機を数える時から例のガラガラとガードの上を貨物列車が駆け去る時のような焼夷弾の落下音が鳴り始めたが、伊沢の頭上を通り越して、後方の工場地帯へ集中されているらしい。軒先からは見えないので豚小屋の前まで行って後を見ると、工場地帯は火の海で、呆れたことには今迄頭上を通過していた飛行機と正反対の方向からも次々と米機が来て後方一帯に爆撃を加えているのだ。するともうラジオはとまり、空一面は赤々と厚い煙の幕にかく

れて、米機の姿も照空燈の光芒も全く視界から失われてしまった。北方の一角を残して四周は火の海となり、その火の海が次第に近づいていた。

仕立屋夫婦は用心深い人達で、常から防空壕を荷物用に造ってあり目張りの泥も用意しておき、万事手順通りに防空壕に荷物をつめこみ目張りをぬり、その又上へ畑の土もかけ終っていた。この火じゃとても駄目ですね。仕立屋は昔の火消しの装束で腕組みをして火の手を眺めていた。消せつたつて、これじゃ無理だ。あたしゃもう逃げますよ。煙にまかれて死んでみても始まらねえや、仕立屋はりヤカーに一山の荷物をつみこんでおり、先生、いっしょに引上げましょう。伊沢はそのとき、騒々しいほど複雑な恐怖感に襲われた。彼の身体は仕立屋と一緒に滑りかけているのであったが、身体の動きをふりきるような一つの心の抵抗で滑りを止めると、心の中の一角から張りさけるような悲鳴の音が同時に起つたような気がした。この一瞬の遅延の為に焼けて死ぬ、彼は殆ど恐怖のために放心したが、再びともかく自然によるめきだすような身体の滑りをこらえていた。

「僕はね、ともかく、もうちよつと、残りますよ。僕はね、仕事があるのだ。僕はね、ともかく芸人だから、命のこととの所で自分の姿を見凝め得るような機会には、そのところの所で最後の取引を試みることを要求されているのだ。僕は逃げたいが、逃げられ

ないのだ。この機会を逃がすわけに行かないのだ。もうあなた方は逃げて下さい。早く、早く、一瞬間が全てを手遅れにしてしまう」

早く、早く。一瞬間が全てを手遅れに。全てとは、それは伊沢自身の命のことだ。早く、それは仕立屋をせきたてる声ではなくて、彼自身が一瞬も早く逃げたい為の声だった。彼がこの場所を逃げだすためには、あたりの人々がみんな立去った後でなければならぬのだ。さもなければ、白痴の姿を見られてしまう。

じゃ先生、お大事に。リヤカーをひっぱりだすと仕立屋も慌てていた。リヤカーは路地の角々にぶつかりながら立去った。それがこの路地の住人達の最後に逃げ去る姿であった。岩を洗う怒濤の無限の音のような、屋根を打つ高射砲の無数の破片の無限の落下の音のような、休止と高低の何もないザアザアという無気味な音が無限に連続しているのだが、それが府道を流れている避難民達の一かたまりの登音なのだ。高射砲の音などはもう間が抜けて、登音の流れの中に奇妙な命がこもっていた。高低と休止のない奇怪な音の無限の流れを世の何人が登音と判断し得よう。天地はただ無数の音響でいっぱいだった。米機の爆音、高射砲、落下音、爆発の音響、登音、屋根を打つ弾片、けれども伊沢の身辺の何十米かの周囲だけは赤い天地のまんなかでともかく小さな闇をつくり、全然ひっそりしている

のだった。変てこな静寂の厚みと、気の違いのような孤独の厚みがとつぷり四周をつつんでいる。もう三十秒、もう十秒だけ待とう。なぜ、そして誰が命令しているのだから、どうしてそれに従わねばならないのだから、伊沢は気違いになりそうだった。突然、もだえ、泣き喚いて盲目的に走りだしそうだった。

そのとき鼓膜の中を掻き廻すような落下音が頭の真上へ落ちてきた。夢中に伏せると、頭上で音響は突然消え失せ、嘘のような静寂が再び四周に戻っている。やれやれ、脅かすやがる。伊沢はゆっくり起き上って、胸や膝の土を払った。顔をあげると、気違いの家が火を吹いている。何だい、とうとう落ちたのか、彼は奇妙に落ちていた。気がつくとき、その左右の家も、すぐ目の前のアパートも火をふきだしているのだ。伊沢は家の中へとびこんだ。押入の戸をはねとぼして（実際それは外れて飛んでバタバタと倒れた）白痴の女を抱くように蒲団をかぶって走りだした。それから一分間ぐらいのことが全然夢中で分らなかつた。路地の出口に近づいたとき、又、音響が頭上めがけて落ちてきた。伏せから起ると、路地の出口の煙草屋も火を吹き、向いの家では仏壇の中から火が吹きだしているのが見えた。路地をでて振りかえると、仕立屋も火を吹きはじめ、どうやら伊沢の小屋も燃えはじめているようだった。

四周は全くの火の海で府道の上には避難民の姿もすくなく、火の粉がとびかい舞い狂っているばかり、もう駄目だと伊沢は思った。十字路へくると、ここから大変な混雑で、あらゆる人々がただ一方をめざしている。その方向がいちばん火の手が遠いのだ。そこはもう道ではなくて、人間と荷物の悲鳴の重りあつた流れにすぎず、押しあいへしあい突き進み踏み越え押し流され、落下音が頭上にせまると、流れは一時に地上に伏して不思議にびったり止まってしまい、何人かの男だけが流れの上を踏みつけて駆け去るのだが、流れの大半の人々は荷物と子供と女と老人の連れがあり、呼びかわし立ち止り戻り突き当りはねとばされ、そして火の手はすぐ道の左右にせまっていた。小さな十字路へきた。流れの全部がここでも一方をめざしているのは矢張りそつちが火の手が最も遠いからだ、その方向には空地も畑もないことを伊沢は知っており、次の米機の焼夷弾が行く手をふさぐこの道には死の運命があるのみだった。一方の道は既に両側の家々が燃え狂っているのだが、そこを越すと小川が流れ、小川の流れを数町上ると麦畑へでられることを伊沢は知っていた。その道を駆けぬけて行く一人の影すらもないのだから、伊沢の決意も鈍つたが、ふと見ると百五十米ぐらい先の方で猛火に水をかけているたった一人の男の姿が見えるのであった。猛火に水をかけるといっても決して勇しい姿ではなく、ただバケツをぶらさげてい

るだけで、たまに水をかけてみたり、ぼんやり立ったり歩いてみたり変に痴鈍な動きで、その男の心理の解釈に苦しむような間の抜けた姿なのだった。ともかく一人の人間が焼け死にもせず立っていられるのだからと、伊沢は思った。俺の運をためすのだ。運。まさに、もう残されたのは、一つの運、それを選ぶ決断があるだけだった。十字路に溝があつた。伊沢は溝に蒲団をひたした。

伊沢は女と肩を組み、蒲団をかぶり、群集の流れに訣別した。猛火の舞い狂う道に向けて一足歩きかけると、女は本能的に立ち止り群集の流れの方へひき戻されるようにフラフラとよろめいて行く。「馬鹿！」女の手を力一杯握ってひっぱり、道の上へよろめいて出る女の肩をだきすくめて、「そっちへ行けば死ぬだけなのだ」女の身体を自分の胸にだきしめて、ささやいた。

「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をただまっすぐ見つけて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね」女はごくんと頷いた。うなず

その頷きは稚拙であつたが、伊沢は感動のために狂いそうになるのであつた。ああ、長い長い幾たびかの恐怖の時間、夜昼の爆撃の下に於て、女が表した始めての意志であり、

ただ一度の答えであった。そのいじらしさに伊沢は逆上しそうであった。今こそ人間を抱きしめており、その抱きしめている人間に、無限の誇りをもつのであった。二人は猛火をくぐって走った。熱風のかたまりの下をぬけようと、道の両側はまだ燃えている火の海だった。すでに棟は焼け落ちたあとで火勢は衰え熱気は少なくなっていた。そこにも溝があふれていた。女の足から肩の上まで水を浴せ、もう一度蒲団を水に浸してかぶり直した。道の上に焼けた荷物や蒲団が飛び散り、人間が二人死んでいた。四十ぐらいの女と男のようだった。

二人は再び肩を組み、火の海を走った。二人はようやく小川のふちへでた。ところが此処は小川の両側の工場が猛火を吹きあげて燃え狂っており、進むことも退くことも立止ることも出来なくなったが、ふと見ると小川に梯子はしごがかかけられているので、蒲団をかぶせて女を下し、伊沢は一気に飛び降りた。訣別した人間達が三々五々川の中を歩いている。女は時々自発的に身体を水に浸している。犬ですらそうせざるを得ぬ状況だったが、一人の新たな可愛い女が生れてた新鮮さに伊沢は目をみひらいて水を浴びる女の姿態をむさぼり見た。小川は炎の下を出外れて暗闇の下を流れはじめた。空一面の火の色で真の暗闇は有り得なかったが、再び生きて見ることを得た暗闇に、伊沢はむしろ得体の知れない大きな

疲れと、涯<sup>はて</sup>しれぬ虚無とのためにただ放心がひろがる様を見るのみだった。その底に小さな安堵があるのだが、それは変にケチくさい、馬鹿げたものに思われた。何もかも馬鹿馬鹿しくなっていた。川をあがると、麦畑があった。麦畑は三方丘にかこまれて、三町四方ぐらいの広さがあり、そのまんなかを国道が丘を切りひらいて通っている。丘の上の住宅は燃えており、麦畑のふちの銭湯と工場と寺院と何かが燃えており、その各々の火の色が白、赤、橙<sup>だいだい</sup>、青、濃淡とりどりみんな違っているのである。にわか風が吹きだしてごうごうと空気が鳴り、霧のようなこまかい水滴が一面にふりかかってきた。

群集は尚<sup>えんえん</sup>蜿蜒と国道を流れていた。麦畑に休んでいるのは数百人で、蜿蜒たる国道の群集にくらべれば物の数ではないのであった。麦畑のつづきに雑木林の丘があった。その丘の林の中には殆ど人がいなかった。二人は木立の下へ蒲団をしいてねころんだ。丘の下の畑のふちに一軒の農家が燃えており、水をかけている数人の人の姿が見える。その裏手に井戸があつて一人の男がポンプをガチャガチャやり水を飲んでいたのである。それを目がけて畑の四方から忽ち<sup>たちま</sup>二十人ぐらいの老幼男女が駆け集つてきた。彼等はポンプをガチャガチャやり、代る代る水を飲んでるのである。それから燃え落ちようとする家の火に手をかざして、ぐるりと並んで煖<sup>だん</sup>をとり、崩れ落ちる火のかたまりに飛びのいたり、煙に



顔をそむけたり、話をしたりしている。誰も消火に手伝う者はいなかった。

ねむくなつたと女が言い、私疲れたのとか、足が痛いのか、目も痛いのかの呟きのうち三つに一つぐらいは私ねむりたいの、と言った。ねむるがいいき、と伊沢は女を蒲団にくるんでやり、煙草に火をつけた。何本目かの煙草を吸っているうちに、遠く彼方に解除の警報がなり、数人の巡査が麦畑の中を歩いて解除を知らせていた。彼等の声は一様につぶれ、人間の声のようではなかった。蒲田署管内の者は矢口国民学校が焼け残ったから集れ、とふれている。人々が畑の畝うねから起き上り、国道へ下りた。国道は再び人の波だった。然し、伊沢は動かなかつた。彼の前にも巡査がきた。

「その人は何かね。怪我をしたのかね」

「いいえ、疲れて、ねているのです」

「矢口国民学校を知っているかね」

「ええ、一休みして、あとから行きます」

「勇気をだしたまえ。これしきのことには」

巡査の声はもう続かなかつた。巡査の姿は消え去り、雑木林の中にはとうとう二人の間だけが残された。二人の人間だけが——けれども女は矢張りただ一つの肉塊にすぎない

ではないか。女はぐつすりねむっていた。凡ての人々が今焼跡の煙の中を歩いてる。全ての人々が家を失い、そして皆な歩いている。眠りのことを考えてすらいないであろう。今眠ることができるのは、死んだ人間とこの女だけだ。死んだ人間は再び目覚めることがないが、この女はやがて目覚め、そして目覚めることよって眠りこけた肉塊に何物を附け加えることも有り得ないのだ。女は微かであるが今まで聞き覚えのない鼾声をたてていた。それは豚の鳴声に似ていた。まったくこの女自体が豚そのものだと思つた。そして彼は子供の頃の小さな記憶の断片をふと思ひだしていた。一人の餓鬼大将の命令で十何人かの子供たちが仔豚を追いまわしていた。追いつめて、餓鬼大将はジャックナイフでいくらかの豚の尻肉を切りとつた。豚は痛そうな顔もせず、特別の鳴声もたてなかつた。尻の肉を切りとられたことも知らないように、ただ逃げまわっているだけだった。伊沢は米軍が上陸して重砲弾が八方に唸りコンクリートのビルが吹きとび、頭上に米機が急降下して機銃掃射を加える下で、土煙りと崩れたビルと穴の間を転げまわって逃げ歩いている自分と女のことを考えていた。崩れたコンクリートの蔭で、女が一人の男に押えつけられ、男は女をねじ倒して、肉体の行為に耽りながら、男は女の尻の肉をむしりとして食べている。女の尻の肉はだんだん少くなるが、女は肉慾のことを考えているだけだった。

明方に近づくと冷えはじめ、伊沢は冬の外套がითもきていたし厚いジャケツもきているのだが、寒気が堪えがたかった。下の麦畑のふちの諸方には尚燃えつづけている一面の火の原があつた。そこまで行つて煖をとりたいと思つたが、女が目を覚すと困るので、伊沢は身動きができなかつた。女の目を覚すのがなぜか堪えられぬ思いがしていた。

女の眠りこけているうちに女を置いて立去りたいと思つたが、それすらも面倒くさくなつていた。人が物を捨てるには、たとえば紙屑を捨てるにも、捨てるだけの張合いと潔癖ぐらいはあるだろう。この女を捨てる張合いも潔癖も失われているだけだ。微塵みじんの愛情もなかつたし、未練もなかつたが、捨てるだけの張合いもなかつた。生きるための、明日の希望がないからだつた。明日の日に、たとえば女の姿を捨ててみても、どこかの場所に何か希望があるのだろうか。何をたよりに生きるのだろうか。どこに住む家があるのだから、眠る穴ぼこがあるのだから、それすらも分りはしなかつた。米軍が上陸し、天地にあらゆる破壊が起り、その戦争の破壊の巨大な愛情が、すべてを裁いてくれるだろう。考えることもなくなつていた。

夜が白んできたら、女を起して焼跡の方には見向きもせず、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場をめざして歩きだすことにしようと思つた。伊沢は考えていた。電車や汽車は

動くだろうか。停車場の周囲の枕木の垣根にもたれて休んでいるとき、今朝は果して空が晴れて、俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうかと伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであった。

# 青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集」ちくま文庫、筑摩書房

1990（平成2）年3月27日第1刷発行

底本の親本：「白痴」中央公論社

1947（昭和22）年5月10日発行

初出：「新潮 第四十三巻第六号」

1946（昭和21）年6月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：砂場清隆

校正：伊藤時也

2005年12月11日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 白痴

坂口安吾

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>